

日本グループ・ダイナミクス学会会報

ぐるだい

JGDA
ニュース

The Japanese Group Dynamics Association

<http://www.groupdynamics.gr.jp/>

第41号

(2012年7月20日)

発行所：〒812-8581 福岡県福岡市東区箱崎 6-19-1

九州大学大学院人間環境学研究院 人間科学部門心理学講座

山口裕幸研究室

日本グループ・ダイナミクス学会

E-mail : sec-general@groupdynamics.gr.jp

発行人：山口裕幸、編集担当：坂田桐子

《 目 次 》

§ 第59回大会(於 京都大学)のご案内：永田素彦……………1

§ 国際学会大会参加報告……………2

☆ The 13th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology

寺口 司

☆ The 24th Annual Meeting of Human Behavior and Evolution Society

横田晋大

§ 東日本大震災に関する会員の報告……………4

☆ 被災後のこと：水田恵三

§ 常任理事会からのお知らせとお願い……………5

☆ 役員選挙について：結城雅樹

§ 事務局からのお知らせとお願い……………6

研究の国際化支援制度（英文論文校閲補助）について／実験社会心理学研究掲載予定論文／
実験社会心理学研究の特集テーマ募集／書評募集

§ 広報担当からのお知らせ／諸連絡先……………7

★★ 第59回大会のご案内 ★★

日本グループ・ダイナミクス学会第59回大会へのお誘い

大会委員長 永田素彦（京都大学）

京都大学で開催される日本グループ・ダイナミクス学会第59回大会も、いよいよ間近に迫ってまいりました。今大会は、ワークショップ6件、ロング・スピーチ13件、ショート・スピーチ41件、

English Session5 件、ポスター発表 43 件のお申込みをいただいています。シンポジウムは、「東日本大震災：コミュニティの復興をどう支えるか」というテーマで公開制とし、グループ・ダイナミックスならではの強みと貢献を広く一般の方々と交えて議論しアピールしたいと考えております。また、アジア社会心理学会、日本社会心理学会、日本グループ・ダイナミックス学会の 3 学会合同企画シンポジウム「The present and future of Asian social psychology」、および、ヴァージニア大学の大石繁宏先生をお招きしての特別講演「社会心理学の過去と未来：何が社会心理学特有のアプローチと言えるのか」を企画しています。多くの皆様のご参加を心よりお待ち申し上げます。

会場の京都大学吉田南キャンパスですが、交通は意外と不便です。特に、京都駅や阪急河原町駅からバスをご利用になる場合には、渋滞で予想以上に時間がかかることがしばしばありますので、余裕をもって移動されるようお願い申し上げます。京都駅からは、地下鉄で今出川駅まで行き、そこから 201 系統のバスで京大正門前で下車するルートが、料金は高くなりますが、時間的には安定します。京阪出町柳駅からは、徒歩で 20 分ほどかかります。また、学会当日は、同じキャンパス内で「京都大学ジュニアキャンパス 2012」というイベントも開催されていて、もしかすると少しにぎやかかもしれません。

大会当日は、京都大学の学生スタッフにお手伝いをお願いしています。例年の大会に劣らず実り多い大会にすべく、準備委員、学生スタッフ一同、できる限りの準備をしまいにします。行き届かない点も多々あるかと存じますが、なにとぞご寛容のほどお願い申し上げます。大会当日、多くの会員の皆様と京都大学でお目にかかれまことを、大会準備委員、学生スタッフ一同、心より楽しみにお待ちしております。



< 京都大学総合人間学部 >

★★ 国際学会大会参加報告 ★★

☆The 13th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology 参加報告

寺口 司（大阪大学大学院人間科学研究科）

2012 年 1 月 26 日から 28 日の間、私はアメリカ合衆国カリフォルニア州のサンディエゴで開催された the Society for Personality and Social Psychology の第 13 回大会に参加してまいりました。悪天候により予定していた便が欠航するなどのハプニングに遭遇しながらもアメリカの地に降り立つと、そこは春かと思えるほどの温暖な天候で、心地良い塩梅の海風が吹く素敵な街でした。極寒に震え、インフルエンザの脅威におびえる日本の 1 月とは比べ物にならないほどの快適さでした。また、サンディエゴは「基地の街」で、海軍基地や海兵隊基地が多いとのこと。ホテルのそばの港でも多くの船やヨットが係留されている中で、巨大な軍艦が一際目立つ形で停泊していたりもしました。そのような場所ではありましたが、街並み全体としては落ち着いた雰囲気醸し出しており、その一方で夜はメインストリートのバーやパブがにぎわうといった、何とも面白い街でした。

今回の大会では、私は攻撃者への評価が評価者の感情と集団カテゴリーで変わるかについてポスター発表を行いました。私が発表したセッションでは全部で 241 もの発表があり、昼休みのあとということもあってか、非常に多くの人でにぎわっておりました。私の発表場所は会場の隅のほうであったにも関わらず、多くの方々に発表を見ていただきまして、拙い英語ながらも質疑応答を交わすことができました。しかし、濃い議論を、となるとやはり私の乏しい英語力では難しく、伝えたい内容を伝えきれないという、もどかしい思いを何度も経験しました。それでも相手の方はゆっくり話してくれたり、じっくり聴いてくれたりと、非常に優しさを感じました。しかしその分、やはりもっとスムーズに議論が出来ないのかと悔いが残ります。

この大会の中で強く感じたのは海外研究者たちの積極的な姿勢です。発表を聴いていても、多くの人々が「どうだ！私の研究は面白いだろう！」といった風で、嬉しそうに自分の研究を話す姿が印象的で、良い刺激ともなりました。私もあのように自分の研究を語れるほどの良い研究が出来れば、と思います。

帰りの飛行機では「次こそは濃密な議論を！」と来年でのリベンジを誓い、今はその 2013 年大会のアブストラクトを書いている最中です。次回大会はジャズ発祥の街、ルイジアナ州ニューオーリンズとのこと。次は晴れ晴れとした思いで、ジャズを聴いて帰ることができるように頑張ります。

☆The 24th Annual Meeting of Human Behavior and Evolution Society 参加報告

横田晋大（広島修道大学）

2012 年 6 月 13 日から 17 日までアメリカのニューメキシコ州アルバカーキにて行われた The 24th Annual meeting of Human Behavior and Evolution Society (HBES) に参加してきました。アルバカーキが砂漠の街で、昼間は暑さと乾燥が厳しい気候でした。今回の HBES は、その開催日が the 49th Annual meeting of the Animal Behavior Society の最終日とオーバーラップする形で開催されました。私が HBES に参加するのは、通算 4 回目になります。

私が HBES に足繁く（？）参加する大きな理由は 2 つあります。1 つは学際性の高さです。動物行動学会とコラボレーションすることからも分かるとおり、HBES は非常に学際的な学会です。ざっと見ただけでも、心理学者のみならず、進化生物学、動物生態学、神経生理学、文化人類学、遺伝学、経済学、社会学、政治学など、参加する研究者は多岐にわたります。片や脳の賦活画像の研究が紹介されていると思ったら、もう片方ではフィールドワーク研究が紹介されており、気が付けばコンピューターシミュレーション研究の話を聞いていたりします。皆、「進化」をキーワードとして、「人はどこから来てどこへ行くのか」との命題に取り組んでいるのです。私は、HBES に参加する度、大きな刺激を受けます。知的好奇心をくすぐられるのは言うまでもありませんが、帰りの飛行機の中で「僕がやってる研究に興味はあるのだろうか」という自問自答を繰り返します。フィールドワークで新たな発見や見識を報告したり、脳神経やホルモンを調べたりする方がよっぽど生産的なのではないか、心のような曖昧模糊なものを、しかも実験室実験という手法を用いて調べることにどれほどの意義があるのだろう。更に言うならば、自身の知識の浅さや見識の甘さに愕然とするときもあります。

このままだと、私が HBES に参加するのはわざわざ落ち込むために行くように見られてしまいます。しかし、もう 1 つの参加理由である、フランクさに私は助けられています。HBES は学際性が高い学会であるため、「進化」というキーワードで、分野の垣根を越えてコミュニケーションができます。そのため、研究発表をすると、様々な分野の人たち（時には世界的に有名な先生も！）が話しかけてくれたり、こちらから話しかけることができたりします。研究発表では、意外なところから「interesting!!!!」と評

価されることもあります。そのフランクさは、研究のみに留まらず、ポスター発表会場の裏で、進化をテーマとしたラップを披露するコーナーが設けられるなど、学会中のイベントにも見られます。研究を、学会を楽しもうという雰囲気が見て取れます。垣根を越えて、他の研究者から自身の研究に評価をもらえることは、心理を研究する上での自身の立ち位置を確認することができるだけでなく、研究することに対する自信を与えてくれるのです。

もし、みなさんの研究を文化人類学者や進化生物学者、経済学者などに説明したとき、彼らはどんな感想を持つでしょう？日本の心理学のレベルは決して低くないと私は考えています。しかし、心理学の成果はまだ他の分野には多く知られていないのが現状です。それは、経済学で、今現在、心理学ではよく知られた事実を新しい知見として発表されていることからもうかがい知れます。みなさんが日本で見出した貴重な知見は、発信しなければ科学の世界では「なかったこと」にされてしまいます。世界に発信すること、これが自身の研究をより深く掘り下げることのみならず、心理学全体を発展させることにもつながると思います。分野を問わない科学の饗宴に、みなさんも参加してみませんか？

★★ 東日本大震災に関する会員の報告 ★★

被災後のこと

水田恵三（尚絅学院大学）

尚絅学院大学は宮城県名取市の山側にあり、昨年3月に生じた東日本大震災の被害は幸い少なくて済みました。地震後学内も停電し、学校は春休み中でしたが100人ほどの学生もおり、徒歩や自家用車で帰宅できるものは帰宅させ、できないものは帰途の危険性を勘案し、学内に止まることを決定しました。私は当時学生生活部長をやっていたので、当然しばらく大学にはいなくてはならなかったのですが、辛うじて家族の無事も確認できたので、正直普段シミュレーションで行っている避難所の運営を実際にできるなどと不謹慎にも思っていました。しかし11日のその夜重油で動く発電機によって見たテレビの映像は想像を絶するものでした。津波の被害の大きさを夜知ったのです。沿岸部に家のある学生はショックで泣き出すものもありました。3日間学校は避難所となり、途中で何回か家には帰っていたのですが、最後の学生を県南部まで送り届けた後、自宅に戻り、しばらくは自宅待機となりました(2、3日くらい)。自宅は岩沼市内でしたが幸い被害を免れ、停電や給水、ガスも2、3日で復旧したので、私は被災者とは言えない生活を送りました。その後学生の安否確認で1週間ほどを費やし、大学も5月授業開始が決定したので、しばらく自宅待機となりました。その間、電話やメールが通じないで、松井豊先生や清水裕先生などにも随分ご心配をお掛けしました。その後の調査のことを書こうと思うのですが、2012年は日本心理学会でも社会心理学会でもシンポジウム等で話す機会を与えられているので、ここではグループ・ダイナミックス会員としての自分を意識して書こうと思います。

3月下旬、名取市の計らいでガソリンを便宜してもらった関係で、調査に行くことができました。その間、西田公昭先生からは随分励ましていただきました。しばらくは、名取市や仙台市、相馬市などの避難所に行っていたのですが、3月下旬に工学系の研究者の知り合いのついで、大船渡市と陸前高田市に調査に行きました。写真はそのときのものです。神戸大学の先生のご助言でアスベスト対策にマスクをしております。すべての津波の被害地で感じてはいましたが、そのときの陸前高田市の光景は忘れることはできません。光景というと視覚ですが聴覚で言うとあの静寂、そして嗅覚で言うとすべてを流された

後の無臭です。その後、研究者の自分にできることとしてなるべく多くの被災地を見なくてはと考えると、北は岩手県の宮古市の北の普代村、南は福島県の相馬市や被災者が避難している会津若松市までほぼ東北地方太平洋側の全域の被災地を見て、可能な限り避難所や仮設住宅での面接調査を行ってきました。私は社会心理学の中ではマイナーなフィールドワークという研究手法をとっているのですが、東北大学文学部心理学研究室の伝統であった安倍社会心理学の門徒であるので、抵抗もなく図々しくフィールドに入っていました。その手法(躊躇せずに現地に入る)については細江達郎先生始め諸先輩方から多くを教えていただいたつもりでおります。また、阪神淡路大震災以降現地で調査したことが随分役に立ちました。ただ一方で、被災者の方には迷惑な話で、被災地である東北から来たということで大目に見ていただいたのではないのでしょうか。今思い起こすと、神戸の地震に関して図々しく調査をして、何でも知っている(本当は何も分かっていなかった)という顔をして発表していたのをとても気恥ずかしく反省しています。藤田正先生が下手な発表したらただではおかないぞ(口には出しませんが)といつもすごい気迫で近くにいらっしゃったのは無理からぬことかと思えます。

避難所や仮設住宅はグループ・ダイナミックスが実際に生じている場としては非常に生々しいものがあります。マニュアルどおりにはいかない避難所運営。リーダーによって変わる雰囲気。仮設住宅も地域ごと、規模ごとに異なり、自治会の有無やリーダーの特徴、復興計画への賛同などが住民に大きな影響を及ぼしています。調査方法は参与観察です。現時点では、無理に聞きたいことを聞くのではなく、被災者の方が自ら語るまでじっと待っているのが大半です。その事実を後生のために記録し残すため、大学の同僚の心理学者や社会学者と一緒に現地を回っています。



今後は報告書などで調査結果を公表していきます。最後に、紙面をお借りして、調査に関してご助力いただいた諸先生、とりわけ安藤清先生に感謝を申し上げます。

★★ 常任理事会からのお知らせとお願い ★★

役員選挙について

担当 結城雅樹

本年度は、次期（2013 年度・2014 年度）の役員選挙を実施する年に当たります。以下の日程で実施する予定です。会員の皆様には、選挙台帳作成へのご協力と共に、積極的な投票をお願い申し上げる次第です。

- 9 月下旬：選挙台帳（案）を送付
- 10 月下旬：選挙台帳（案）異議申し立て締め切り／選挙台帳確定
- 11 月中旬：役員選挙（会長、理事、監事）の投票用紙、選挙人名簿などの送付
- 12 月上旬：投票締め切り
- 12 月中旬：役員選挙（会長、理事、監事）開票
- 1 月上旬：理事の互選による常任理事選挙
- 2 月上旬：選挙結果の確定と公表

★★ 事務局からのお知らせとお願い ★★

☆研究の国際化支援制度（英文論文校閲補助）について

この制度は、本学会会員の研究の国際化を支援するため、会員が自らの研究成果を英文誌に投稿する際に英文校閲代金の一部を補助するものです。年齢制限などございませんので、皆様奮って申請してください。

☆実験社会心理学研究 掲載予定論文（2012/07/10 現在）

◆2012 年度 52 巻 1 号 （8 月中 発送予定）

原著論文

黒川光流

リーダーの管理目標および課題の困難度がリーダー－フォロワー間葛藤への対処方略に及ぼす影響

平川 真・深田博己・樋口匡貴

要求表現の使い分けの規定因とその影響過程：ポライトネス理論に基づく検討

Takumi Watanabe, Kaori Karasawa

Self-ingroup overlap in the face of mortality salience

宮本 匠・渥美公秀・矢守克也

人間科学における研究者の役割－アクションリサーチにおける「巫女の視点」－

田垣正晋

先進事例からみる障害者施策推進の住民会議のあり方

内田由紀子

人間関係のスタイルと幸福感：つきあいの数と質からの検討

◆2012 年度 52 巻 2 号 （2 月中 発送予定）

原著論文

浅井千秋

組織特性、リーダーシップ行動および就業態度が自発的職務改善に与える影響

神原 歩・遠藤由美

合意性推測の高さが脅威に晒された自己肯定感を修復する効果

早瀬 良・坂田桐子・高口 央

患者満足度を規定する要因の検討—医療従事者の職種間協力に着目して—

資料論文

神原 歩・遠藤由美

高合意性情報が強制承諾実験における態度変化に与える効果：自己肯定感の維持という観点からの検討

野呂千鶴子

市町村合併に伴う保健師の活動システムの追跡

中村和彦

大学1年春学期におけるラボラトリー方式の体験学習の効果—体験から学ぶ力の影響—

◆2013 年度 53 巻 1 号 (8 月中 発送予定)

原著論文

油尾聡子・吉田俊和

社会的迷惑行為の抑止策としての好意の提供

資料論文

白岩祐子・唐沢かおり

被害者参加人の発言および被害者参加制度への態度が量刑判断に与える影響

石盛 真徳・岡本 卓也・加藤 潤三

コミュニティ意識尺度（短縮版）の開発

吉田琢哉・中津川智美

対人葛藤対処方略の選択に対する関係目標の影響—接近—回避の軸に基づく検討—

☆実験社会心理学研究の特集テーマ募集

「実験社会心理学研究」には、グループ・ダイナミックスや社会心理学に関連する特集を掲載します。特集は、読みごたえのある論文3編程度で構成します。特集についての企画をお持ちの会員は、企画の趣旨、特集論文の概要等をまとめた企画書（A4版1－2枚程度）を、編集委員長に提出して下さい。企画の採択については、常任編集委員会で審議、決定します。特集論文の審査手順など詳細については、学会ホームページに掲載してあります。

URLは、http://www.groupdynamics.gr.jp/journal/event_info.html です。ご参照ください。

なお、「実験社会心理学研究」は、特集の掲載によって、一般投稿論文の掲載に大幅な遅滞が生じないことを重視しています。企画を提出される方は、この点をお含みおき下さい。

☆実験社会心理学研究の書評候補募集

事務局では、実験社会心理学研究の書評の候補となる著作を随時募集致しております。よい本がありましたら事務局までご推薦ください。

★★ 広報担当からのお知らせ ★★

◆ JGDA_Flash

グルダイでは【日本グループ・ダイナミックス学会 広報（速報）メールマガジン】（JGDA_Flash）を運用しています。これは、速報性が要求される情報・ニュースを会員のみなさまに e-mail でお知らせしようとするものです。現在登録されている会員は約 600 名です。グルダイ会員のみなさまの中には、会員名簿にメールアドレスを掲載されていない方や最近アドレスを取得された方、またアドレスを変更された方なども少なくないのではないかと思います。登録、メールアドレスの変更、配信停止の連絡、マガジンに関するご希望・お問い合わせ等は、以下のアドレスのグルダイ広報メールマガジン運営担当マスターにお願いいたします。

office@groupdynamics.gr.jp

◆会員の皆様がお書きになった新著を、400 字程度でご推薦いただき、上記までメールにて随時ご送付いただきたいと思います。なお、ご推薦の文書はなるべく著者でない方に書いていただき、ご著書に関する出版社等の情報とともに、その推薦の方のお名前とご所属などもお書きくださいますようお願いいたします。これまでに掲載された記事は以下の WEB で閲覧できます。

<http://www.groupdynamics.gr.jp/bookreview/index.html>

◆研究会案内等についてのニュース記事の掲載希望も大歓迎で受け付けています。上記のアドレスまでお送りください。なお、これまでに配信された Flash は、以下の WEB で閲覧可能です。

<http://www.groupdynamics.gr.jp/cgi-bin/magbbs2.cgi>

★★ グルダイ学会関係連絡先 ★★

本学会では、事務支局を中西印刷株式会社に開設しております。入退会、住所・所属等変更、会費納入、機関誌等の未着・メールマガジンなどのメール配信先の登録・変更・停止等の連絡先は、事務支局である中西印刷株式会社までご連絡ください。

また、本年度から、論文投稿先・審査書類送付先も中西印刷株式会社となっております。詳細は下記をご覧ください。各種お問い合わせの具体的な連絡先は以下の通りです。

◆事務支局【入退会、住所・所属等変更、その他お問い合わせ先】

日本グループ・ダイナミックス学会事務支局（担当：中山・糸魚川）

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入

中西印刷株式会社 学会部内

TEL:075-415-3661 FAX:075-415-3662

E-mail:jgda@nacos.com

URL: <http://www.groupdynamics.gr.jp/>

◆学会運営・対外業務関連

日本グループ・ダイナミックス学会本部事務局

〒814-0180 福岡市城南区七隈 8-19-1

福岡大学人文学部文化学科 池田浩 研究室

E-mail : sec-general@groupdynamics.gr.jp

◆投稿論文・学会誌編集関連

【論文投稿先・審査書類送付先】

日本グループ・ダイナミクス学会 編集事務局（担当：田中裕史）

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入る

中西印刷(株)内

電話：075-441-3155 FAX：075-417-2050

E-mail : jjesp-hen@groupdynamics.gr.jp

URL: <http://www.groupdynamics.gr.jp/>

【編集委員長】

沼崎 誠

〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1

首都大学東京 人文科学研究科

E-mail : numazaki@tmu.ac.jp

◆広報関連

【ぐるだいニュースの編集・記事の投稿、メールマガジンへのニュース記事投稿、新刊案内や研究会案内等のニュース記事、公募情報など】

広島大学大学院総合科学研究科 坂田桐子研究室

〒730-8521 東広島市鏡山 1-7-1

TEL: 082-424-6577

E-mail : office@groupdynamics.gr.jp までお送りください。

また、マガジンに関するご希望・お問い合わせ等も、同アドレスまでお送りください。

<編集後記>各地に豪雨被害をもたらした梅雨がやっと明けて喜んだのも束の間、すぐに猛暑がやってきました。どれだけクーラー無しで過ごせるかチャレンジしていますが、既に挫折しそうです。(編集子)